

令和 3 年 8 月 16 日現在

機関番号：24102

研究種目：研究活動スタート支援

研究期間：2019～2020

課題番号：19K24207

研究課題名（和文）在宅生活でのシーティング浸透のための研修と介入効果に関する実証研究

研究課題名（英文）Knowledge and awareness of seating for medical and long-term care welfare workers

研究代表者

篠原 真咲（Shinohara, MASAKI）

三重県立看護大学・看護学部・助教

研究者番号：30846366

交付決定額（研究期間全体）：（直接経費） 1,400,000円

研究成果の概要（和文）：医療職・介護福祉職のシーティングに対する知識と意識を明らかにすることを目的にアンケートを実施した。シーティングという言葉を知っていると回答した人は、約3割であったことから、医療職・介護福祉職共に認識が低いことが明らかとなった。シーティングの知識と意識について医療職と介護福祉職を比較した結果有意な差が認められた。そのため、知識や技術の向上を図るための教育を職種別に強化することが必要である。

研究成果の学術的意義や社会的意義

車いすを使用している人や、座っている時間が身体に与える影響は、姿勢保持や意欲、食事等の日常生活にも大きく影響を与える。この正しい姿勢を保持できるようにすることをシーティングという。医療職・介護福祉職のシーティングに対する知識や意識を明らかにすることで医療職・介護福祉職への教育の普及につなげる。さらに、シーティングに必要な教育プログラム作成の基礎資料として、今後職種別教育プログラムを開発して教育活動を通じてシーティングの普及に繋げていく。高齢化に伴い今後ますます増加が見込まれる車いす利用者の増加、褥瘡等の二次障害の予防により、健康寿命を延伸していくことを目指す。

研究成果の概要（英文）：It was carried out a survey in order to clarify the knowledge and awareness of the seating of the medical profession and nursing care welfare workers. About 30% of the respondents answered that they knew the word seating, indicating that both medical and long-term care welfare workers have low awareness. As a result of comparing the medical staff and the long-term care welfare staff regarding the knowledge and consciousness of seating, a significant difference was found. Therefore, it is necessary to strengthen the education to improve knowledge and skills by job.

研究分野：在宅看護

キーワード：車いす シーティング 在宅 知識 意識

様式 C - 19、F - 19 - 1、Z - 19 (共通)

1. 研究開始当初の背景

車いすシーティング実践ガイドラインによると、車椅子シーティング (Wheelchair Seating) は「車椅子利用者へ快適な座位環境を提供し、日常生活の自立、生活の質 (Quality of life, QOL) の向上を図る技術の体系であり、その重要性はリハビリテーション医療や福祉の領域で広く認識されつつある。根拠に基づいた医療 (evidence based medicine) が求められる今日、車椅子シーティングもその実践の効果を科学的根拠に基づいて検証することが必要とされている。」と述べられている。車いすは、最も手軽な福祉用具として病院をはじめ様々な場所で使用されている。押川ら (2016) の調査でも、車いすを使用する年齢、場所、疾患は様々であり、使用している車いすやクッションの附属品の有無も様々であることを報告しており、現在では多種多様な車いすが必要とされていることがわかる。一方で、車いすを提供する多くの専門職種は病院や在宅の場に存在している。最も車いすに詳しいのは、リハビリの専門職であるが、専門職種別によるシーティングに関する知識や実践能力に関しては調査された先行研究はみあたらない。総務省の 2016 年の社会生活基本調査の生活時間に関する資料によると、人の生活時間は睡眠時間 7.4 時間、食事 1.4 時間、通勤・通学・移動時間約 1 時間、テレビ・新聞閲覧等で 2.3 時間、休養・くつろぎで 1.3 時間となっており、ここから座位時間を換算すると最低でも 5 時間となる。さらに仕事関連がデスクワークとなれば、9 時間程度を座位で過ごすことと推測される。つまり人の生活は座位が中心であることがわかる。そこで生活時間の中心を占める座位時間を快適かつ安全・安楽に過ごすためにはシーティングは重要であることが理解できる。特に、車いすを利用する人々にとって車いすで過ごす時間は、日常全般を過ごす大切な場所であり、かつ移動の手段であるが、在宅の家屋の状況により身体に合った車いすが選べず、姿勢の崩れによる誤嚥性肺炎が生じやすくなったり、褥瘡や側弯症などの二次合併症発生のリスクも高くなったりしている。このように在宅の車いす生活は様々な影響を余儀なくされることとは言うまでもない。そのため、車いすシーティングが非常に重要となってくる。

2. 研究の目的

車いすを使用する医療系・介護福祉系専門職にシーティングの認識とその効果について知識と意識を明らかにすることを目的にアンケート調査を実施した。

3. 研究の方法

1) 期間：令和 2 年 8 月～令和 3 年 1 月

2) 場所：A 県内の在宅系医療・介護施設

3) 対象者：車いすを使用する医療・介護専門職

4) 調査依頼方法：調査は無記名自記式質問紙法とし、郵送法により回収を行う。

A 県各協議会に研究者が自ら赴き、会長に書面をもって研究概要を説明し、同意していただける場合には承諾書の記入を依頼する。その結果、紹介を受けた各ステーションには、各管理者に書面をもって研究概要を説明し、同意していただける場合には承諾書の記入を依頼する。その際、対象となる対象者数を把握し、後日、承諾が得られた各ステーション管理者へ対象者全員分の協力依頼文・質問紙・返信用封筒 (切手貼付済) を郵送にて送付する。該当する研究対象者に協力依頼書と質問紙及び返信用封筒を配布していただくよう依頼。対象者には協力依頼書の書面をもって協力を依頼し、回答後返信用封筒に入れ投函することで、研究への同意とみなす。

5) 調査内容

調査で使用する質問紙の内容は、以下の 68 項目である。

(1) 基本属性 (10 項目)

(2) 褥瘡予防ケアの調査 (2010、藤田尚子改変)

計 28 項目 各項目に対し、実施「1. 行っている」「2. 行っていない」と知識、「1. 知っている」「2. 知らない」をそれぞれ選択肢とした。

(3) シーティングに関する知識 (20 項目)

シーティング・ガイドラインに沿って作成した自作質問紙。シーティングに関する知識をみる質問紙。

(4) シーティングに関する意識 (10 項目)

シーティング・ガイドラインに沿って作成した自作質問紙。シーティングに関する意識をみる質問紙。

6) 分析方法

調査項目の関連について、職種間については、医療職（医師・看護師・理学療法士・作業療法士・言語聴覚士）介護福祉職（介護支援専門員・介護福祉士・社会福祉士・ヘルパー）に分け、欠損値を除いた 687 人を分析対象とし、カイ 2 乗検定を行った。なお、統計処理には SPSS Institute Ver.27 を使用し、有意水準 5 % とした。

7) 倫理的配慮

研究依頼書・説明書・承諾書を作成し、研究者が対象となる各協議会に赴き、会長に対して、文書及び口頭で研究目的・方法・収集データの取扱いについて承諾を得た。その際、研究への協力は自由意思であること、研究協力の辞退や中止となっても対象施設には何ら不利益が生じないことを説明した。研究協力の承諾が得られた時点で本研究を開始することも伝えた。研究対象者には、研究の対象となる専門職への研究依頼書は各施設管理者を通し文書をもって目的・方法・収集データの取扱いについて説明し、質問紙の返送をもって、同意とみなす。ここに、施設の長からの強制力は働かないと考え、研究依頼書には、研究協力は自由意思であること、研究協力への不同意・回答への拒否等いかなる場合も研究対象者に不利益が生じないことを記載する。収集データは、施設等が特定されないように匿名性を守り、研究以外には使用せず、施錠できる戸棚で管理することについても記載する。

4. 研究成果

1) 研究対象施設の概要

質問紙は、訪問看護ステーション 6 か所、訪問介護事業所 3 か所、在宅診療所含む病院 2 か所、開業医 7 か所、訪問リハビリ事業所 5 か所、介護老人保健施設 5 か所計 28 施設、900 枚配布し、722 枚回収した。そのうち欠損値を除く 687 例を有効回答数とした（回収率 76%）。

2) 回答者の属性 (表 1)

男性 188 名 (27%)、女性 499 名 (73%) であった。平均年齢は、44.71 歳 (20 ± 79 歳) であった。雇用体制としては、常勤 533 名 (78%)、非常勤 154 名 (22%) であった。専門職種の内訳は、医師 12 名 (1.7%)、看護師 152 名 (22.1%)、理学療法士 54 名 (7.9%)、作業療法士 20 名 (2.9%)、言語聴覚士 4 名 (0.6%)、介護支援専門員 76 名 (11.1%)、介護福祉士 258 名 (37.6%)、社会福祉士・ヘルパー 111 名 (16.2%) であった。

表1 対象者の特徴 (n)

	n	%
性別		
男	188	27
女	499	73
年齢		44.71
平均年齢 (最小-最大)		(20-79)
雇用体制		
常勤	533	78
非常勤	154	22
職種		
医師	12	1.7
看護師	152	22.1
理学療法士	54	7.9
作業療法士	20	2.9
言語聴覚士	4	0.6
介護支援専門員	76	11.1
介護福祉士	258	37.8
社会福祉士・ヘルパー	111	16.2

3) シーティングに関する内容

質問を実施する前のプレテストでは、シーティングという言葉を知ったことがある人は、198 名 (29%)、知らない人は 489 名 (71%) であった。今までシーティングに関する研修を受けた経験のある人は、105 名 (15%)、知らない人は 582 名 (85%) であった。さらに、施設内等で褥瘡対策委員会の経験のある人は 23 名 (3%)、知らない人は 664 名 (97%) であった。

4) シーティングに関する知識

シーティングに関する知識としては、医療者と介護福祉職で「シーティングに関する機器には、重さや大きさ、調整箇所などがあり、必要な調整について対応方法がわかる。」のみ有意差がみられなかった。結果を表 2 に示す。

表2 知識と行動

	n(%)		p値
	職種		
	医療職	介護福祉職	
1. シーティングという言葉を知っている。	109 (45%)	331 (25.6%)	<0.001
そう思う	133 (55%)	445 (74.4%)	
そう思う以外			
2. 車いすの種類について列挙できる。			0.001
そう思う	105 (43.4%)	149 (33.5%)	
そう思う以外	137 (56.6%)	296 (66.5%)	
3. シーティングによって座り心地が良くなる。			<0.001
そう思う	187 (77.3%)	286 (64.3%)	
そう思う以外	55 (22.7%)	149 (35.7%)	
4. シーティングによって座位時間の延長が可能となる。			0.001
そう思う	172 (71.1%)	261 (58.7%)	
そう思う以外	70 (28.9%)	184 (41.3%)	
5. シーティングによってQOLが向上する。			<0.001
そう思う	183 (75.6%)	257 (57.6%)	
そう思う以外	59 (24.4%)	188 (42.2%)	
6. シーティングによってむせを改善できる。			0.021
そう思う	178 (73.6%)	289 (64.9%)	
そう思う以外	64 (26.4%)	156 (35.1%)	
7. シーティングによって栄養状態の改善ができる。			0.002
そう思う	135 (55.8%)	193 (43.4%)	
そう思う以外	107 (44.2%)	252 (56.6%)	
8. 上肢機能に問題のある車いす利用者に対してシーティングを行うことは、上肢機能の問題を改善できる。			0.004
そう思う	180 (74.4%)	283 (63.6%)	
そう思う以外	62 (25.6%)	162 (36.4%)	
9. 移乗に問題がある車いす利用者に対してシーティングを行うことは、介助量の軽減や離床機会・時間の問題につながる。			<0.001
そう思う	189(78.1%)	282(63.4%)	
そう思う以外	53(21.9%)	163(36.6%)	
11. 座位保持に問題がある車いす利用者に対して、シーティングを行うことは、座位保持時の姿勢が安定する。			<0.001
そう思う	179 (74.0%)	251 (56.4%)	
そう思う以外	63 (26.0%)	194 (43.6%)	
14. シーティングを行うことは、関節可動域の維持ができる。			0.001
そう思う	167 (69.0%)	251 (56.4%)	
そう思う以外	75 (31.0%)	194 (43.6%)	
15. シーティングによって、褥瘡発生リスクの軽減につながる。			<0.001
そう思う	202 (83.5%)	318 (71.5%)	
そう思う以外	40 (16.5%)	127 (28.5%)	
18. シーティングによって、車いす利用者の満足度が上がる。			0.001
そう思う	178 (73.6%)	269 (60.4%)	
そう思う以外	64 (26.4%)	176 (39.6%)	
19. シーティングによって、社会参加が可能となる。			0.001
そう思う	160 (66.1%)	236 (53.0%)	
そう思う以外	82 (33.9%)	209 (47.0%)	
20. シーティングは、車いす利用者だけでなく、その周囲にいる人の満足度も上がる。			<0.001
そう思う	154 (63.6%)	218 (49.0%)	
そう思う以外	88 (36.4%)	227 (51.0%)	

5)職種別シーティングに関する知識

シーティングに関する知識については、「褥瘡予防のために円座は使用しない」と「シーティングに関するケアは車いす利用者を尊重した上で実施している。」の2項目のみ有意差がみられた。表3に示す。

表3 シーティングに関する知識

	n(%)		p値
	職種		
	医療職	介護福祉職	
3. 褥瘡予防のために円座は使用しない			
そう思う	50 (20.7%)	194 (43.6%)	<0.001
そう思う以外	192 (79.3%)	251 (56.4%)	
7. シーティングに関するケアは、車いす利用者を尊重した上で実施している			
そう思う	47 (19.4%)	121 (27.2%)	<0.024
そう思う以外	195 (80.6%)	324 (72.8%)	

6) 考察

シーティングの認識については、医療職、介護福祉職共に認知度は3割程度と低い状況であった。どの職種も車いすは業務上使用したり、目にしたりすることは多いが、シーティングという知識や技術に関しては、今後の普及が必要である。褥瘡に関する項目では、医療者が知識はあるが、実践で十分に活かされていない項目がみられた。一方介護職は褥瘡予防に関する福祉用具やオムツの吸収力の高いものの使用等、実践で行っていることに関する項目は、医療職よりも知識も意識も高いことが分かった。これは、在宅において、介護職によるオムツ交換・清拭・体位交換等の際に褥瘡予防にかかわることが多いが、医療職は実践を行う場数が少ないことが影響していると考えられる。しかし、栄養に関する項目では、医療職の方が知識・意識ともに有意差があることから、栄養に関することの重要性を理解していることが反映されたと考える。

シーティングに関しては、シーティングという言葉は知らなくても、シーティング技術によって、姿勢の改善やQOLの向上、むせの回避、変形予防、疼痛予防により、関節可動域の維持が行え、それによって褥瘡発生リスクの軽減にもつながることは理解されていた。さらに、車いす利用者の満足度が上がり、社会参加が可能となることも知識として持っている方が多い事は、車いす利用者だけでなく、その周囲にいる人の満足度も上がることを理解していることにつながったと考える。しかし、シーティングに関するケアについては、円座を使用しないこと、車いす利用者を尊重した上でシーティングを実施していることは、シーティングの基本であり、円座は円の部分で体重を受けるため、中心部が虚血状態となり、褥瘡予防にはつながらないことを知っており、実践に活かしていることが明らかとなった。さらに、車いす利用者を尊重した上で実施していることは、相手を尊重したケアの基本姿勢であり、車いす利用者に限らず、相手を尊重するという、専門職の基本的姿勢が反映されていた。今後は、職種別にシーティングに関する教育を実施し、実践でも活用していけるようにすることが、車いすを使用する人やその周囲の人にも二次障害の予防等、好影響を与えようとする。

7) 結論

シーティングに関する認識は低いため、職種別に教育を行っていくことが、車いす利用者の二次障害の予防に繋がる可能性がある。

引用文献

1. 押川武志, 亀ヶ谷忠彦, 宮寺亮輔他: 車椅子シーティング対象者の実態調査. 九州保健福祉大学研究紀要. 17号 p.107-112. 2016

参考文献

1. 佐々木八千代, 白井みどり: 介護保険施設におけるシーティングに対する職員の認識, 老年看護学会誌, 22巻2号, p.47-52. 2018.

5. 主な発表論文等

〔雑誌論文〕 計0件

〔学会発表〕 計0件

〔図書〕 計0件

〔産業財産権〕

〔その他〕

-

6. 研究組織

	氏名 (ローマ字氏名) (研究者番号)	所属研究機関・部局・職 (機関番号)	備考
--	---------------------------	-----------------------	----

7. 科研費を使用して開催した国際研究集会

〔国際研究集会〕 計0件

8. 本研究に関連して実施した国際共同研究の実施状況

共同研究相手国	相手方研究機関
---------	---------